

## 論文の内容の要旨

論文題目 宗教・ナショナリズム・暴力——ヒンドゥー・ナショナリスト運動の  
イデオロギーに関する研究

氏 名 近藤光博

本研究は、現代インドのヒンドゥー・ナショナリスト運動が有する一群のイデオロギー言説の歴史的、構造的な分析を試みるものである。ここでヒンドゥー・ナショナリスト運動とは、日本で一般に「ヒンドゥー至上主義」「ヒンドゥー原理主義」などと呼ばれ習わされるもののことで、その中心的な組織としては民族奉仕団 **Rashtriya Swayamsevak Sangh**、インド人民党 **Bharatiya Janata Party**、世界ヒンドゥー協会 **Vishwa Hindu Parishad** などをあげることができる。また現代というのは、1980年代から90年代までの20年間のことを指す。これはヒンドゥー・ナショナリスト運動の台頭が一貫して継続し、世界中の耳目を集めたアヨーディヤー **Ayodhya** 運動をはさんで、現在のインド人民党連立政権を生み出した期間であり、独立インド史においてとくに重要である。

一次資料としては、それら諸団体のトップ・イデオログたちが書いたものや、語ったものの記録を用いた。言語はほとんど英語である。ごく限定的に、ヒンディー語資料と、私自身が現地調査で聞き取った言葉なども用いている。ただし、諸々のキー概念については適宜、それに対応するヒンディー語（私が通じている唯一の現地語）の意味を明らかにし、英語の語りに重ねられる独自の観念世界が浮かび上がるよう工夫した。

第1章「序章」では、用語法の説明にかなりの紙幅を割いている点は特徴的である。これは、先行研究との効果的な接合をねらったものであるのと同時に、用語の選択と使用方法は論者の理解そのものであるとの考えによるものでもある。したがって、ここでの用語法の説明は本研究の結論の大きな部分を先どりしている。

そのことは、本研究本論の最初の章（第2章）でおこなわれる、ヒンドゥー・ナショナリズム史の概観にも当てはまる。この作業は、本研究それ以降の箇所が登場する諸団体、

諸個人の背景とともに、1980年代と90年代という時期が独立インドの歴史とヒンドゥー・ナショナリズムの歴史において有する意味を明らかにする。これらの点の解明は、ヒンドゥー・ナショナリスト・イデオロギーの解析という本研究の主題をあつかう第3章以降の部分のための導入の役割を果たす。しかしそれだけではない。ヒンドゥー・ナショナリズムの歴史を語ることにより、用語法の説明のときと同じく、本研究の結論が大きく先どりされているのである。これもまた歴史記述とは一つの理解の表明であるとの考えによる。

第3章からはいよいよ一次資料の分析にとりかかる。最初の章（第3章）では、ヒンドゥー・ナショナリスト・イデオロギーの中核的概念「ヒンドゥー・ネイション Hindu nation; Hindu rashtra」の意味内容の解明が試みられる。そこで明らかにされるように、彼らが言う「ヒンドゥー・ネイション」もしくは単に「ヒンドゥー」とはいわゆるヒンドゥー教徒のことではない。それは仏教徒、ジャイナ教徒、シク教徒、アニミスト、非アーリヤ人などを含み、なおかつカーストやジェンダーによって一切分断されることのないものとして観念されるような、非常に独自の集団概念である。

第4章は、「ヒンドゥー・ネイション」もしくは「ヒンドゥー」の共通の基盤とされる「ヒンドゥー文化」「ヒンドゥー的価値観」「ヒンドゥー的生のあり方」「ダルマ」「ヒンドゥーイズム」等々がどのようなものとして観念されているのかを論じる。そこで明らかになるのは、ヒンドゥー・ナショナリスト・イデオロギーの語りにおいては、宗教に限られないが宗教を中核に据えるような人間的生の特定次元、たとえば〈宗教＝文化〉とでも表わしうるよう次元が観念され、上記のような多様な言葉で呼ばれていることである。またこの章では、彼らのイデオロギーのキー概念の一つである「霊性 spirituality」についても、その用法と意味内容が明らかにされる。

第5章では、ヒンドゥー・ナショナリスト・イデオロギーが近代的な観念＝制度であるところの一宗教としての「ヒンドゥー教」を一つの全体としてどのように構想しているのかを論ずる。ここでの議論が明らかにするのは、現代のヒンドゥー・ナショナリスト・イデオロギーが「ヒンドゥー教の標準化」を推進するということである。ここで標準化とは、第一に、古代からの歴史的一貫性の主張、第二に、多様性に対して統一性を優先させることで「ヒンドゥー教」の単位性を固定すること、第三に、キリスト教モデルにしたがった「ヒンドゥー教」の教義整備、そして第四に、西洋近代的な価値観を大幅に受け入れることを意味する。なおこの章は、「マハトマ」ガンディーの非暴力とヒンドゥー・ナショナリスト・イデオロギーを比較検討するパートを含む。ヒンドゥー・ナショナリスト運動の破壊性に鑑み、この点を論じることの意味は大きい。

ヒンドゥー・ナショナリスト・イデオロギーは、以上三つの章で明らかにされた「ヒンドゥー」と「ヒンドゥーイズム」と「ヒンドゥー教」を〈没落と再興〉という歴史物語のなかに位置づけ、理解し、自らと自らの同志（と目される人々）からコミットメントを引き出そうとする。この点について論じるのが第6章である。そこで示されるのは、〈ヒンドゥーとヒンドゥーイズムは古代黄金期の栄光を失い、歴史のなかで次第に没落していった。

それが現代のインドの諸問題の根本原因である。今こそヒンドゥーは立ち上がらねばならない」という物語が人々の神話的想像力を刺激し、動員をより容易にするということである。

第7章では、「ヒンドゥー・ネイション」の外部／敵として想定される「一神教」に対するヒンドゥー・ナショナリストのイデオロギー上の攻撃を分析する。そこでは、「一神教」の脅威の源泉が、「ヒンドゥー・ネイション」の低層／被抑圧者層に対する「改宗」攻勢とその不可避の結果として理解される分離主義であることが指摘される。キリスト教は巧みな戦術によって、イスラームは粗暴な手法によって、ヒンドゥー人口を縮減させインドの領土を縮小させようと目論んでいる、と真剣に信じられている。それは「ヒンドゥー・ネイション」に対する攻撃に他ならないから、物理暴力を伴う反撃がなされたとしても大義にかなったことだ、と言われる。これはコミュニナリズムに対するイデオロギー上の裁可、正当化である。

「改宗」の問題は単に宗教的帰属の変更や人口統計の推移を意味するのではなく、インドの〈文明化＝近代化＝開発〉をめぐる問題でもある。すなわち、インド社会の低層／被抑圧者層の「向上」とは何で、それを誰がどのようになすのかという問題が、改宗の企てには不可分に付随するということである。第8章は、このことについての確認を導入として、ヒンドゥー・ナショナリスト・イデオロギーにおける〈文明化＝近代化＝開発〉観を分析していく。そこから明らかになるのは、彼らの〈文明化＝近代化＝開発〉観が近代の文化ナショナリストのものとしてはきわめて標準的なものだということである。「西洋化なき近代化」という観念が彼らの関心をとくによく表現するものであることが確認される。

結論部は大きく二つのパートに分かれる。最初のパートでは、本研究本文（第2章から第8章まで）で行われた諸々の分析を総合して、現代のヒンドゥー・ナショナリスト・イデオロギーの包括的で構造的な解析が目ざされる。その結果、現代のヒンドゥー・ナショナリスト・イデオロギーの比較的安定した構造として、一つの大目標、二つの行動計画、二つの行動指針が抽出される。大目標とは「現代世界においてヒンドゥー・ネイションとインド国民国家の偉大さと強さを実現すること」である。行動計画の第一のものは「ヒンドゥー・サンガタン——ヒンドゥー・ネイションを強化もしくは組織化する」、同じく第二のものは「インド国民国家の栄光化——文化、宗教、経済、政治、軍事などあらゆる分野でインド国民国家を格上げさせる」である。行動規範の第一のものは、「非・非暴力——自己防衛と尊厳という大義によって裁可を与えられたとき、暴力を行使することにためらってはならない」であり、第二のものは「統一と秩序と規律——あらゆる場合において統一性を多様性に優先させよ。インド国内における構造的暴力については、これに沈黙せよ」である。

結論部第二のパートでは、現代宗教論、とくに「宗教復興」論のなかにヒンドゥー・ナショナリズムという運動／現象を位置づけるという作業をおこなう。最初に指摘されるのは、反世俗・反近代・反西洋などの契機をあまり強く読み込むべきではないという点であ

る。それは単にヒンドゥー・ナショナリズム理解を妨げるということではなく、他の「宗教復興」の諸事例との比較を地政学的な固定性に閉じ込めてしまうと論ぜられる。

次に指摘されるのは、現代宗教論における宗教分類学の留意点についてである。ヒンドゥー・ナショナリズムを「宗教復興」との関わりで主題化しようとする場合、「ヒンドゥー教」という概念を所与のものとして扱ってはならないと論ぜられる。それは、「ヒンドゥー教」とナショナリズムの宿命的な連動のためでもあり、またヒンドゥー・ナショナリズムによる「ヒンドゥー教」の標準化と専有の企てに取り込まれないためでもある。ここでも先と同様、宗教分類学の地政学的な固定化について批判が向けられる。特定領域と特定宗教を特権的に結びつけてしまう視座を廃し、通地域的な比較の視座をもつべきことが推奨される。